頁。

⑫ 横山源之助、前掲書、五五頁。

⑬ 東京都労働局「山谷の労働事情調査」（昭和36年9月）

⑭ 西成保健所「分室のあゆみ」（昭和37年7月）

⑮ エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」（武田訳、昭和35年・新潮社「マル・エン選集」2）二四七頁。

⑯ Anderson, N.; The Hobo, 1923 (Univ. of Chicago Press, 1961) p. 27～33.

⑰ 総理府統計局「家計調査報告」（昭和35年度）

⑱ 土田英雄「住居」（ソシオロジ、前掲号）

〈「社会問題研究」12巻4号（昭和37年・11月）、「病める日本――二つの断章」より転載〉

Ⅲ　現代日本のスラム問題

――一つの短いおぼえ書き――

一、「スラム」の概念

フランシス・ベーコンは、例の「ノーヴァム・オルガヌム」のなかで、「太陽は、宮殿の中だけでなく泥溝の中をも照らすが、そのことによって自らを汚すわけではない」という含蓄深い警句を吐いて、高踏的スコラ学からの解放を主張した。もともと「泥沼」を意味するイギリスの方言 slump と同根と推測される「slum」[1]をめぐる学会の百家争鳴は、真に現実的な日本社会学への一契機たりえよう。

だが、スラムにかんする報告の任を与えられた私は、いささか当惑を感じる。というのも、スラム概念に一義的明確性が欠け、「スラモロジー」というものがあるわけでもなく、また国際スラム統計があるわけでもないからである。従来、スラム概念の定義とスラムの研究は、さまざまな人々によって試みられてきているが、これらを大別すれば、重点のおき方によって三種が区別されよう。第一は、もっぱら住居の悪さ・空気の汚なさといった非衛生の側面を強調するいわば「公衆衛生学的」なものであり、第二は、もっぱら住民の所得の少なさ・生活の低さ

といった貧困の側面を強調するいわば「社会政策学的」なものであり、第三は、規範の弱さ、秩序の乏しさといった「解体」の側面を強調するいわば「社会生態学的」なものである。[2] 通常、社会学者が強調しがちなのは第三の側面であり、この場合、スラムは、外部社会から「分凝（segregate）」し、内部生活において「偏倚（deviate）」せる社会的「解体地域（disorganized area）」とみなされがちである。[3] だが、こうした社会学者たちも、「物的荒廃」とか「過密居住」といった現象はスラムにつきまとう当然のこととして暗黙ないし公然と承認しているようだし、実際には、メルクマールを、比較的ヴィジブルな住宅に求めて、（場合によっては、居住者の社会経済的条件をも加味した上で）「不良住宅地区選定基準」あるいは「不良環境地区構成要因」といったものを複合指標にもとづいて設定し（第1表参照）、その基準に適合する地域を調査して、それを俗に「スラム調査」と解し、またその結果をスラム資料として利用するのが現状である。[4] つまり、スラム概念は、その都度「操作的定義」を下されているわけである。

さしあたり当面は、とにかく「スラム」と呼ばれるものをできるだけ広く含め、スラム概念の「外延」を拡大することによって、なるべく広汎な問題領域をカバーしうる可能性を失わないでおくことが、実践的要請に応ずるために比較的有効ではないかと思われる。一応、「不良住宅地域」ないし「居住条件劣悪地域」といった比較的に客観的な単一のメルクマールにもとづいてスラム概念を広義に用い、その上で、観察された諸事実を通じて、さまざまなスラムの社会的性格なり歴史的背景の相違に応じて類型化すればよいのではないかと考えられる。[5] とはいえ、かりにスラム概念の外延を拡大して、「封建スラム」や「農村スラム」といったもの

が考えられるにしても、[6] この語が成立した歴史的背景を考えれば、近代の都市スラム＝狭義のスラムこそ焦点になるということは、今さらことわるまでもあるまい。じっさい、一八二五年以前にこの語が用いられている文例は、今のところO・E・Dにも記載されていないのであり、このことは、イギリス産業革命の完成・終結の時期と思い合わせるとき、重要な示唆を含

第1表　不良環境地区の構成要因の一例

（東京都地区環境調査，S．32）

A類　土地及び建物の悪環境または家屋及び住居の低質

A類Ⅰ　土地及び建物の悪環境

第1項（土地の不当使用）

第2項（土地の悪環境）

第3項（建物の悪環境）

A類Ⅱ　家屋及び住居の低質

第4項（家屋の悪質）

第5項（家屋設備の低質）

第6項（居住の低質）

B類　居住者の低生活水準

第7項（居住者の低生活水準）

C類　地区の有害性または危険性

第8項（保健衛生上の有害性）

第9項（風紀公安上の有害性）

第10項（火災警防上の危険性）

（各類別要因ごとに，その類別要因のうちの項目要因のいずれか一つ以上をみたす場合は，その項目要因を含む類別要因は，充足されたものと判定する。）

んでいる。[7]

二、失業・貧困・孤立

さて、スラム概念を広狭いずれの意味に用いるとも、その語自体に一種の貶価的トーンがまつわりについているかぎり、[8]いかなるスラムも、とにかく「問題」地域であるという一事において共通しており、問題の質と量とが、個々のスラムによって異なるにすぎない。こうしたスラム的諸問題は、ある場合には、重なり合い、からみ合ってさえ現われる。とくに、「巨大複合スラム」とも呼ばれ、[9]国連調査団をも驚かせた日本最大のスラム「釜ケ崎」の場合、老朽鉄筋住宅・不法占拠バラック・ドヤ街その他を内包しており、行旅病人・家族欠損・不就学はいうに及ばず、故買・賭博・売春・暴力・密売にいたるまで、まさに「偏倚」の百花があまねく咲き乱れている。それは、いわば「社会病理のデパート」にほかならない。その実態の詳細は、すでにさまざまなルポルタージュ・啓蒙的書物・調査報告その他を通じて、明らかにされてきたとおりである。[10]

これまで、社会学者の関心をもっぱら惹いてきたのは、さきに少しふれたようにスラムの内部における「解体」であり、その外部からの「分凝」であった。しかし、このようないわゆる「社会学的」あるいは「人間関係」的側面のみを強調することによって、スラムをめぐる古くからの、しかしまたそれだけにもっとも基本的な問題を、見逃したり、軽く見たりしてはなるまい。スラムは、もともと近代大都市の裏街における極貧者の不潔な集積として問題となった

のであり、したがってそれは、なによりまず、近代的貧困の問題である。貧困がとくに住居の劣悪と住居費の高率となって現われる事実は、ローントリー以来さまざまな人たちによって指摘されているが、[11]もちろん、貧困は、住居のみならず基本的生活財一般の欠乏を意味し、財の欠乏は、養分の不足と心身の荒廃をもたらしがちである。

ところで、「貧困」という語自体は、遠く司馬遷によっても用いられているが、近代社会における貧困＝財の欠乏は、所得の欠乏によってもたらされるのであり、さらに、所得の欠乏は、いわば「オキュペイショナル・ロール」、つまり財の生産過程における社会的役割の欠乏によって、しばしば規定される。完全ないし不完全失業は、現代社会学のタームに飜訳すれば、私がここでいう「役割欠乏」[12]の一形態にほかならない。しかも、社会学的に重要なもう一つの現象は、オキュペイショナル・ロールの欠乏が家族内での役割、いわば「ファミリー・ロール」の欠乏をしばしばもたらすのみならず、逆にファミリー・ロールの欠乏がオキュペイショナル・ロールの欠乏への契機ともなりうるということである。[13]もちろん、具体的な個々のケースにおける因果関係は容易には決しがたいが、たとえばドヤ街にあふれる失業者たちの間に家出・離婚・別居ケースが意外に多いといういくつかの調査結果（第2表参照）は、少なくとも、これら両次元での役割欠乏の間になんらかの連関が認められうることを示唆するには充分である（第3表参照）。

かくして、そこに一種の「欠乏のサイクル」が生じる。あるいは、「欠乏の加乗効果」ないし「欠乏の連鎖反応」と云いかえられてもよい。ある次元の欠乏は他の欠元の欠乏の契機たりうるし、逆に、ある次元の充足は他の次元の充足の契機たりうる。こうした欠乏現象は、今後

第2表　ドヤ街流入者の家族的背景

〔失職事由〕

	比率（%）
企業閉鎖	10.6
人員整理	9.9
事業不振	8.3
病気	11.5
家庭の事情	7.0
その他	19.1
無記入	33.6
計	100.0

〔家族形態〕

	比率（%）
独身者	53.4
直系卑属のみ	11.8
直系尊属のみ	4.8
配偶者と直系卑属	14.1
配偶者のみ	5.8
その他	10.1
計	100.0

「大阪市西成区福祉地区の実態調査報告資料」（昭和35年2月・大阪社会学研究会）

〔山谷の単身者〕（S．36．3）

	比率（%）
死別	30.8
別居	21.1
未婚	30.8
その他	15.4
無解答	1.9
計	100.0

「東京都におけるスラム社会形成にかんする研究」（昭和37年3月・東都福祉会館）

〔釜ケ崎の単身者〕（S．38．1）

	比率（%）
別居家族記入あるもの	33.3
〃 記入なきもの	65.6
不明	1.1
計	100.0

「大阪市環境改善地区実態調査」（昭和38年3月・大阪社会学研究会）

第3表〔スラムの家族構成〕　（東京，S．36．3，408世帯，単位%）

		世田谷（引揚者寮）	三河島（第3種）都営住宅	山谷（ドヤ街）	本木（バタヤ部落）
正常家族	世帯主＋配偶者	12.0	4.4	24.6	19.1
	世帯主＋配偶者＋子供	44.4	54.9	16.3	39.3
	世帯主＋配偶者＋子供＋孫	0.9	3.5	1.0	
	祖父母＋世帯主＋配偶者	1.9	1.8		
	祖父母＋世帯主＋配偶者＋子供	3.7	3.5		
	祖父母＋世帯主＋配偶者＋子供＋孫				
	世帯主＋配偶者＋直系親族				
	世帯主＋配偶者＋傍系親族	1.9	4.4		
	計	64.8	72.5	41.9	58.4
欠損家族	世帯主（男）のみ	1.9	1.8	57.1	34.9
	世帯主（女）のみ	2.8	4.4		1.1
	世帯主（男）＋子供	7.4	1.8		5.6
	世帯主（女）＋子供	17.6	10.6	1.0	
	世帯主（男）＋子供＋孫		1.8		
	世帯主（女）＋子供＋孫	0.9	0.9		
	祖父（母）＋世帯主（男）		0.9		
	祖父（母）＋世帯主（女）				
	祖父（母）＋世帯主（男）＋子供				
	祖父（母）＋世帯主（女）＋子供	0.9			
	祖父（母）＋世帯主(男)＋子供＋孫				
	祖父（母）＋世帯主(女)＋子供＋孫				
	世帯主（男）＋直系親族	2.8	0.9		
	世帯主（女）＋傍系親族	0.9	4.4		
	計	35.2	27.5	58.1	41.6
総計		100.0	100.0	100.0	100.0
実数		108	113	98	89

文献（35），40頁

の研究過程で、社会構造論および生活構造論との関連の中でいっそう理論的に正しく位置づけられねばなるまいが、典型的には、役割の欠乏（失業）→所得の欠乏＝財の欠乏（貧困）→役割の欠乏（孤立）という形をとって現われるであろう。

一般的にいえば、スラム生活の最大の悩みは、こうした欠乏の加乗にある。もちろん、スラム住民すべてが「六無斉」だというわけではないが、少なくとも、「一箪ノ食、一瓢ノ飲」といった「陋巷」生活に「楽」を見出だす顔回的清貧主義者や、「不義ニシテ貴キハ、我ニ於テ浮雲ノ如シ」と観じて「疏食ヲ飯ヒ水ヲ飲ミ肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスル」ことに喜びを感じるアジア的ディオゲネスや、根っからのミザントロープは、むしろまれな例外でしかない。このような欠乏現象をも、一定の基準からのアブヴァイフングとかデヴィエイションとか云ってしまえばそれまでだが、道徳的あるいは法的規範からのいわゆる「デヴィアント・ビヘヴィア」と、貧困や孤立といった単なる一定の社会的・平均的生活基準からの偏倚とは、一応区別されねばなるまい。[14] この意味からしても、スラムを「反社会的集団」と規定するのはとんでもない間違いであるし、[15] また「解体地域」と規定するだけでは、重要な問題をあいまいにしてしまうと云わねばならないのである。

三、スラム住民の構成

このように、スラムは、さまざまな問題をはらみ、人間疎外の拡大鏡として、また人間福祉の真空地帯として、識者の注目を集め、ときたま——事件でも起きれば——世間一般の関心を

惹きもするのである。そこで、このスラム的諸問題——とりもなおさず社会的諸問題＝社会病理的諸問題なのだが——を一身に具現したいわば「スラム的人間」像の典型ともいうべきものについてのステロタイプ化されたイメージが、人々によって抱かれる。それは、おそらく、汚ない衣服を身にまとい、きまった仕事を持たずに狭く暗い部屋の中で、身寄りもなく近所づき合いもせず、その日その日を望みも喜びもなく送り迎えており、世間のきまりというものには無関心で、怠けぐせをもち、平気で盗みもやりかねない人間といったイメージであろう。もちろん、こうした通俗的ステロタイプでなしに、もっと学問的なスタイルで、スラム的人間の「理念型」（Idealtypus）なり「平均型（Durchschnittstypus）」なりを構成することさえ、不可能ではない。

だが、スラムといっても、その概念の外延が大きければ大きいほど、さまざまな形態があり、いわば「スラム間異質性（inter-slum heterogeneity）」ともいうべきものはきわめて顕著に認められるし、また一定スラムの内部にも、高度の「スラム内異質性（intra-slum heterogeneity）」があり、住民個々の行為と生活の様式が決して同じではないことはいうまでもない。とりわけ、階級・職業あるいは階層などによって区分されうる住民の各カテゴリーは、それが客観的に果たす「機能」においても、またそれがになう「問題」においても、質的・量的にかなり大きな相違を示すのである（第1図参照）。したがって、スラム内部に少しインテンシヴな観察の眼を向けるなら、スラム的人間を「一括」して「デクラセ」「ルンペン・プロレタリア」「ヴァガボンド」「ボヘミアン」「ホームレス・マン」などと簡単に片づけることはできない。こうした皮相・浅薄な「十把ひとからげ」式の見解は、しばしば、「進歩的」と自称

第1図　釜ケ崎住民のカテゴリー区分

（エリート）

ドヤ経営者 店舗所有者 ヨセヤ　etc.	麻薬ボス 暴力団長 手配師etc.
バタヤ 行商・露天商 立ちん坊日雇 失対日雇 etc.	シケ張り ポン引き 麻薬売子 売春婦 etc.

（合法）　（非合法）

（マス）

1. 各象限の広さの順位は，それぞれの人口の多さの順位にほぼ対応する。
2. 量化的尺度を用いて調査できればそれぞれの位置を定めることもできよう。

する人々の間にさえ認められる。だが、少なくとも、今日のスラムは、「ルンペン社会」ではないし、古き「どん底」イメージは古いのである。実際には、仮小屋バタヤ部落のような場合は別として、大部分のスラムの内的構成は、垂直的にも水平的にも複雑、多様であり、それぞれの社会的カテゴリー、とくに諸階層の間には、利害の客観的・主観的な錯綜・対立があり、それは、なんらかの契機によって顕在化することが少なくない。[16] そして、場合によっては、一方にとっての「順機能」が他方にとっての「逆機能」ともなりうるのである。

この意味で、いわば「底辺ボス」あるいは「スラム・エリート」ともいうべき存在を無視することはできない。ドヤ街であれば、簡易宿をはじめとするさまざまないわば「スラム・ビジネス」の所有・経営者が、バタヤ部落であればヨセ屋（仕切り屋）の親方が、陰然重きをなし、公有地を「不法占拠」したバラック街ですら、少なからざる不労所得＝家賃を得るいわば

「バラック・オーナー」がいる。「釜ケ崎」の場合であれば、これらに加えて、暴力・売春・密売などの「犯罪企業」のトップ・マネージメント層が、かなり高度に階梯化・分化せるステイタス・ハイアラキーの頂点に坐り、多くの場合は、「チンピラ」たちをリモート・コントロールしている。

第4表　ドヤ経営と役職関係（釜ケ崎S．34～35）

ドヤ名	経営者	役　　職
H　屋	U.Y.	西成簡易宿組合長・民生委員 社会福祉協議会常任理事
H　荘	U.Y.	民生児童委員長 防犯委員・社協常任理事
M荘園	U.K.	民生児童副委員長・防犯委員 社協副会長・日赤団長
F荘他	K.F.	防犯協会支部長・社協分会長 日赤連合団長
K荘他	M.S.	防犯協会連合副支部長 社協常任理事
N荘他	T.S.	防犯協会地区委員 社協常任理事
K　荘	O.M.	防犯協会地区委員 P.T.A.会長
H荘他	H.R.	社協常任理事
F　屋	K.F.	防犯委員

ただし、こうした現代の底辺ボスたちを、いわゆる資本の本源的蓄積期にみられたような飯場の親方や、[17] かつての搏徒の親分などと同じものと見ることは正しくない。一部には、たしかに、それに近いものは今なお残っており、[18] また、とくに反社会的集団は、独自の支配関係を基軸としている。[19] けれども、一般的に云えば、時代の

進展と社会の変動は、多少の時間的ラグを伴うにせよ、底辺にも反映して、底辺ボスの支配的形態は、経済外的強制を含む擬制的血縁関係を基軸とするものから金銭本位の商業的顧客関係を装うものに（全体としては）移行しつつあり[24]、同時に、たとえばかつての名護町の「年番」がそれに近かったといわれるような[25]、木賃宿の亭主・親代り・賭場の提供者・岡っ引きの手先を一身にかねるといったいわば「多機能（multi-function）的」なものから「単機能（uni-function）的」なものへの分化が認められる。そして、スラムの規模が大きくなればなるほど、地域全体に及ぶ統一的な支配権が単一のボスによって掌握される蓋然性は低くなる。しかし、他方、底辺ボス層内部における一種の階層分化の過程で、財産とプレスティジの格差は拡大し、一部には、一代または数代を重ねて蓄財に成功して「マイ・カー」さえ持つ者も現われ、また、同業者組合での役職についてイニシアティヴをとり、日赤奉仕団や民生委員や保護司といった公的または半公的な役職につき、（第4表参照）集団や制度に乗っかって地域行政に間接的な影響力をもつという場合があることも見逃しえない。

四、スラム・マス

けれども、スラム住民全体のなかで占める量的比率からいえば、こうした底辺ボスやスラム・エリートはとるにたらない。むろん、問題の大部分は、いわば「スラム・マス」にある。もっとも、スラム大衆といっても、その内容は雑多であり、センサスにのっていないような「職業」も少なくなく、聞いて呆れるような「商売」もあるわけで、この点は明治の貧民窟と同じ

である。しかし、スラム大衆を代表する「顔」は、時代によって変化すると考えねばならないし、断片的な資料もこのことを示唆している。こうした日本スラムの代表的職業における歴史的変遷については、いっそう多くの資料を収集し、別途の論稿を準備せねばならないが、乏しいインフォメーションにもとづき、ごくおおざっぱな図式化をあえて試みるなら、戦前のわが国におけるスラムの変遷は、典型的には、（本源的蓄積）→「車挽」型貧民

第5表　明治貧民窟の職業構成の一例

（大阪名護町，M. 21. 9. 30.）

	～15才未満		15才以上		計
	男	女	男	女	
普通商	80	66	169	162	477
質古商	21	15	87	49	172
傘	79	68	271	175	592
菓物	6	26	56	58	146
飲食	7	14	37	34	92
貸物	12	11	39	28	90
工業	26	25	226	115	392
輓夫	0	0	330	0	330
屑	3	0	39	63	105
マッチ	122	257	51	211	641
被雇	143	102	374	203	822
遊芸	10	18	64	43	135
屑拾	234	261	164	433	1092
無業	556	709	67	384	1716
雑業	72	54	628	352	1106
学生	88	54	0	0	142
乞食	159	123	87	112	481
計	1618	1803	2689	2422	8532

大阪南区役所・南警察署の帳簿より　文献(2)231頁

窟――（産業資本確立）→「日稼」型細民街――（独占資本成立）→「職工」型不良住宅地区としてとらえられはしないかとも考えられる。[32] いずれにしても、われわれは、もっと歴史的に底辺の動きを追求する必要があろうが、少なくとも現代にくらべれば、明治期においては、農村出身者が多く、また、比較的にルンペン的性格の強い「無業・雑業」タイプの比重は大きく（第5表参照）、親方子方関係も強かった[33]と考えられよう。

ところで、敗戦は、一挙に四六万五千戸を失わしめたといわれる、大正12年の大震災にもまして、ナショナル・レベルでの全般的なスラム変動の契機となった。とくに、引揚者・復員者・罹災者が巷にあふれ、完全失業者だけで約百六十万（21年4月）、孤児が十二万以上にのぼった敗戦直後の時期には、四百二十万戸の住宅が足りないまま、戦前からの「いわば伝統的焼け残りスラム」や「焼け跡復活スラム」に加えて、壕舎、橋下・高架下バラックなどの形態のもとに「戦後新興スラム」ともいうべきものが各地に簇生し、[34] 大都市の全般的スラム化が現出して、さまざまな生活歴を背負った人々がそこに流入・定着したのであった。だが、敗戦から平和条約に至るボッダム体制下の「経済復興」から、サンフランシスコ体制下の「経済自立」を経て、現在の安保体制下の「経済成長」に至る戦後日本資本主義の再編と発展の過程で、社会的陥没地帯としてヴィジブルな新興スラムもまた「再編成」され、いわば「拡散化」し「分散化」してきたと一般的にはいえる。[35]

また、その内部構成についていえば、現在の代表的スラムの典型的住民層も、全体として「固定化」しつつあり、いわば戦後スラムの「顔」の輪郭が鮮明になりつつあるように見える。今や、現代日本の都市底辺を代表する階層は、期間雇用と日々雇用、民間と失対を含む広

第6表　都市最下層にある社会階層（S．30）

	就業者数（単位千）	都市全就業者中の比率（%）
名目的自営業者	4,288	9.8
1）行商・露天商	577	2.4
2）小商人	433	1.8
3）仲買人	227	1.0
4）資本制的家内工業者	1,071	4.6
自営業者使用人	1,797	7.7
1）商業使用人	279	1.2
2）サービス使用人	1,197	5.1
3）被用職人，家内工業被用者	231	1.4
労働者階級下層	5,922	25.3
1）単純労務者	3,323	14.2
2）生産労働者下層	2,599	11.1
計	10,007	42.8

江口英一「貧困層とその変貌」
島崎・北川編「現代日本の都市社会」
（昭和37年・三一書房）157頁

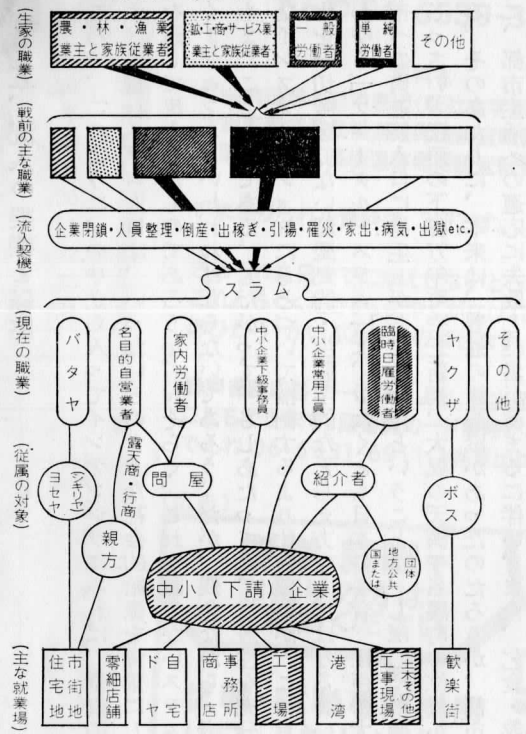
第7表　スラムにおける日雇労働者の比率

地域	項目	比率（%）	調査時期
釜ケ崎・東四条	日雇	37.4	S．35.8
世田谷	単純労働者	31.4	S．36.3
三河島	〃	25.5	〃
山谷	〃	69.4	〃
本木 (1)	〃	98.9	〃
恵美	臨時・日雇	20.6	S．36.8
釜ケ崎・ドヤ	日雇	45.6 (2)	S．38.1

註 (1) バタヤ部落　(2) 単身者の場合
文献(32)99頁，(35)33頁，(38)72頁，
大阪社会学研究会「大阪市環境改善地区実態調査」13頁

義の日雇労働者――不完全失業者の一形態としての――であるといえる。これは、さまざまな調査によって明らかであるし（第6・7表参照）また、とくに大スラムと日雇労働者の深い関係は、大スラムの周辺ないし中央には大きな日雇専門の職業紹介機関が存在するという事実からも、また、釜ヶ崎の場合に見られるように、例の「緊縮財政」→（失業者の氾濫）→「緊急失対法」という一連の政策実施以後にスラムが膨張したという事例からも、充分に推測されるところである。[20] したがって、現代日本のスラム問題の最も重要な一環は、日雇労働者の問題であるといわねばならない。じっさい、そのように云うことは事実に即しているし、また、この点に注目することなしには、スラムを、全社会的背景の中に正しく位置づけることも、労働問題や福祉問題一般との関連においてとらえることも、まったく不可能となるのである。なぜなら、体制の論理が造出せしめる「相対的過剰人口＝産業予備軍」の主要師団として「窮乏化」の焦点に立ち、また日本の独占資本にとって「景気の安全弁」たる機能を果たすものは、まさしく日雇労働者の大群であり、常用労働者との大きな賃金・所得・消費格差ゆえに注目されるのも日雇労働者であり、有業被保護世帯や住宅難世帯のなかで最も大きな比重を占めているのもまた日雇労働者にほかならぬからである。

だが、もちろん、現代日本スラムの代表的階層は日雇労働者のみにとどまらない。これと並んで忘れられてはならないものは、まず第一に、現代の国家独占体制下にますます「系列化」されつつある「下請」中小企業にその大部分が雇われる常用労働者であり、第二は、かつての「居職人」とは区別さるべき資本制的家内労働者であり、さらに第三は、露天商・行商といったむしろ「戦前型＝前近代型貧困階層」に属すべき「名目的自営業者」である。とくに、この

第三の階層の存在は重要であり、[21] いわば理念型的には、江口英一氏が指摘するように戦前型＝前近代型貧困階層と戦後型＝近代型貧困階層が区別され、全体としては前者から後者への移行が認められるにしても、[22] もちろん、実際には、その量的比重の変動はともかくとして、近代型は戦前から存在したし、前近代型は戦後にも存在しているわけである。（第2図参照）

第2図〔現代スラムの主要階層〕